

今どきの若い人のコミュニケーションと無線

JM1LZT 富山俊一

塾屋という仕事柄この 40 年近く、その時々「若者」と付き合い続けてきました。

下は小学校 1 年生から上は大学院生まで。彼ら、彼女らとの交流は、老いゆく私を常にアップデートしてくれ、何とか私が「時代遅れのシーラカンス化」するのを防いでくれたように思います。実にありがたいことです。思い返せば、80年代のファミコンブームの時には生徒から情報をもらい、ゲーム攻略のために徹夜したこともしばしば(^^)

そんな日々を過ごしながらも気づけば私も還暦過ぎ。彼らからすればお父さんではなく、最早おじいちゃんの世代になってしまいました。相変わらず「お勉強」以外のことでのやりとりは活発ではありますが、最近気になるのが若い（若い）子たちの「コミュニケーション力の低下」です。

「今日ね、みきちゃんが授業中に鼻血だしたんだよ！」と叫びながら小学生が教室

に登場するといった光景は昔からよくあることでした。もちろん私は「みきちゃんって誰だよ?!」とツツコミ返すわけですが、問題はここから。かつては小学生（しかも低学年）によくあったこの手の現象が、年を追うごとに「上の学年」に波及し、今や中学生でも普通に見られます。

言うまでもなく、他者とのコミュニケーションのカギは「共有できてる前提を双方がしっかりつかんでいること」だろうと思うわけですが、幼い子ほど「他者のアタマの中身に対する想像力」に欠け、言い換えれば「自分の当たり前が全て」になりがちです。結果「今日ね、みきちゃんが...」発言になるわけですが、どうも最近になればなるほどその手の子供たちが増えてるように感じます。

要因はいろいろあるでしょう。「現場実感」として、単純に「日本語力」の低下は確実に進行していると思いますし、日常会話が質的、量的に貧相になっているようにも思います。大人は子供に「テレビやマンガばかり見てないで、本を読みなさい」と言ってきたという歴史があるわけですが、今や「テレビやマンガすら見ない」子供が増えていていると感じます。ある「物語」の世界に没入し、時間的に拘束されることは快樂であると同時に苦痛でもあるかもしれません。それに耐えられず「早く結論を知りたい」のは常だろう

とは思いますが、どうやら最近ではテレビやマンガの世界ですら「長時間縛られたくない」志向が強まり、「刹那勝負指向」が広まっているように見えます。

「範を垂れるべきオトナ」としては、せめて日常的な言動の質を高め（別に無理に長くや細かくではなく）「コミュニケーションの快樂」を若い人たちに伝えてあげられたらと思っています。

無線歴も人間歴も長い読者諸兄には釈迦に説法かとは思いますが、無線を通じての人との出逢いは、ちょっと他では味わえない独特の悦びがあると思います。年齢、職業、性別、国籍を越えた出逢いの数々は、経験した者だけの特権ではないでしょうか。しかし、実際には「ちょっと難しい場面」も少なくないのも諸兄ならご存知の通りです。CW はまだしも、音声通信の場面で「どう対応したらいいのか困った経験」は、みなさんお持ちではないかと思えます。ケースバイケースでしょうが、つきつめると「相互の常識の違い＝前提条件の違い」が根本的要因と思えます。常識など違って当たり前。その違いをどう乗り越え、理解し合えていくか。「異文化」と触れ合うことは、驚きや恐怖の向こうにある「発見の悦び」だと信じています。

「コミュニケーション自体が目的」であるアマチュア無線の衰退は、ネット社会の進行だけが要因ではなく、ひょっとしたら「今それをやってる人たちの有様の魅力の欠如」もありそうです。599BK が主体の交信を聞いて、果たして若い人たちが興味を持ってくれるのか、自分自身がかつて「近所の無線をやってるお兄さん」の交信を見たり聞いたりし、SWL を通じて感じた「わくわくどきどき感」と照らし合わせながら自問自答の日々だったりしています。「次の走者」にしっかりとバトンを渡すのは、なかなか骨の折れる仕事のようにです(^^;